

教育長だより



鹿児島県三島村教育委員会
教育長

室之園晃徳



1958年生まれ。鹿児島大學教育学部卒業後、鹿児島県の教員として県内の小学校、鹿児島市教育委員会事務所長、大島教育事務所長、鹿児島市立田上小学校長を経て現職。全国一離島の学校数が多い鹿児島県で十年間離島教育に従事し、鹿児島県小学校長会長も務めた。

「ガイド学習」という言葉をご存じでしょうか。教育用語ではありますが、複式学級があるような極小規模校に勤めた経験のある教師でなければ聞き覚えのない言葉かもしれません。実際、鹿児島県のように離島へき地小規模校の多い県の教師であっても、「ガイド学習って何ですか？」と疑問をもつ教師に結構お会いします。「ガイド学習」とは、「間接指導の際、子どもの中から選ばれたガイド（学習の案内役）が教師の指導の下、学習進行計画に従いリードし、相互に協力したり助け合ったりしながら学習を進める学習形態」です。こう説明すると次に「間接指導って何ですか？」という質問が返ってきます。

複式学級には、教師が指導する「直接指導」と、子どもだけで学習を進める「間接指導」の場があります。さらに、教師が直接指導と間接指導を交互に移動することを「わたり（デリバリー）」、指導の段階や時間配分を学年別にずらして組み合わせることを「ずらし（シフト）」といいます。また、指導計画も一本案、二本案、折衷案などの種類があり、極小規模校ならではの業界用語が存在するのです。

小さな学校の子どもたちは、概して明るく素直で純朴です。異年齢集団での交流が密であり、教児一体となったふれあいの場面も多く、強い信頼関係が自然と築かれていく面があります。個に応じた指導が充実するというか、個に応じた指導でなければ学習が成り立ちません。このように小さな学校には多くのよさや強みがあります。しかしその反面、多様なものの見方・考え方を通した練り合い高め合う学習活動などは、なかなか難しいものがあります。限られた人間関係の中で向上心や競争心が育っているか、大集団の中に行ってもたくましく生き抜く力が身に付いているか、教師は常に将来の子どもの姿を思い描く想像力が必要です。

小さな学校の子どもたちは、授業で休まる暇がありません。先生方がつい熱が入って、息つく暇もないピンポンのような授業になってしまふと、へとへとになってしまいます。教師には、これまで学んできた教え方にとらわれず、一人一人の個性に合わせた指導の工夫こそが何よりも重要なのです。

島にUターンしてきた青年から聞いた話ですが、「県本土の高校に進学したら、クラスの人数が多いので授業中に寝ることができたんです。島の学校ではそんなことは絶対無理だったので、なんかうれしくて授業中はいつも寝てたんですよ。」こんな笑い話のような話ですが、私は「さもありなん」と妙に合点がいきました。こんな体験談も一笑に付さず、指導法改善のヒントにして、個に応じた指導の実践に最適な小規模校の教育を、未来の教育モデルの一つに進化させたいと思っています。



複式学級の様子



ガイド学習の様子